

ニュー・ジャーナリズムの特徴

——カポーティの「冷血」とメイラーの
「死刑執行人の歌」を読んで——

沼 野 治 郎

外国語教育に携わる者は、時折その言語が使用されている環境に出かけていくことが勧められている。それは必ずしも容易ではないので、ラジオ・テレビの放送を視聴したり、新聞・雑誌・単行本を読むことによって、できるだけ自らを total immersion に近い状態に置こうとする人も多いのではないかと思う。そこで、このたび、アメリカに見られるニュー・ジャーナリズムと呼ばれる、伝統的な文学や小説とは異なるノンフィクションを取り上げ、その特徴について考察する。

ニュー・ジャーナリズム

まずニュー・ジャーナリズムは、1960年代初めに、ジミー・ブズリン、トム・ウルフ、ゲイ・タリーズなど数名の反抗的な新聞記者が、伝統的なジャーナリズムから袂をわかって、新しいフィクションの手法を実験し始めたことに端を発している。彼らは、伝統的な報道の「客観性追求」の鉄則にあえて挑戦し、非個人的で、区分化され、規格化された報道文に訣別を告げ、事実に即しながら心情的にどうとらえたかという主体性を明らかにして、生き生きとした報道を行うことに着手した。コロンビア大学新聞学大学院は、ニュー・ジャーナリズムを「フィクションの技法を用いて事件を報道する試み、つまり『主観的現実』を提示する一様式」と定義している。そしてカン

注1) ハロウェイ・ブラウン、「米国の活字メディアにおける『ニュー・ジャーナリズム』」,
「新聞研究」1972年8月第253号, p. 10。

サス州立大学新聞学科のエバレット・デニス教授はニュー・ジャーナリズムを、5つに分類して、1. ルポルタージュないし新しいノンフィクション。2. 代替ジャーナリズム (alternative journalism) ないし現代的マックレーキング(すなわち醜聞あさり)。3. 主張するジャーナリズム(advocacy journalism)ないし観点ジャーナリズム(point-of-view journalism)。4. アングラ・ジャーナリズム。5. 精密ジャーナリズム (precision journalism) をあげている²⁾。

ニュー・ジャーナリズム出現の経緯と社会的背景について触れると次のようである。ハロウェイ・ブラウンによれば、ニュー・ジャーナリズムの最初の先行要因は、1950年代末期から60年代初期のフィーチャー記事専門記者を取り巻く環境であって、その頃「多くの新聞は、紙面に新風を送り込むような、生き生きした格式ばらない私的な文体を持つ記者を養成し、競争相手の新聞社から引き抜くことに奔走した。³⁾」この環境の中に、後にニュー・ジャーナリズムの作品を著して、活躍することになるトム・ウルフ、プレズリン、ゲイ・タリーズ、ハンター・トンブソンなどがいた。

そして、これに先だって、1940年代半ばに起こった特記すべき文体変革がニュー・ジャーナリズムの文体への素地になったことも付記しなければならない。これは、当時の新聞や通信社が採用するに至った「読みやすさの定則」(Readability Formula)といわれるもので、旧来の厳格な構文要領を退け、語彙や構文を容易にしてコミュニケーションをはかろうとする、オープンスタイルなものを目指していた⁴⁾。次に、社会的背景として、60年代のアメリカに目を転じると、この間に数多くの深刻な事件や問題が起こっていることが判る。64年以後毎年のように起こった黒人の暴動、65年のベトナム北爆開始、反動としての反戦運動、学園紛争、ケネディ大統領、ロバート・ケネディ上院議員、キング牧師の暗殺、宇宙開発、経済力の衰退、環境保護、消費者運

2) 小松原久夫「ニュー・ジャーナリズムは何処へ行く。完全な真実を伝えるために…」
『総合ジャーナリズム研究』, 1972年秋季号, p. 38。

3) ブラウン, 前掲論文, p. 14。

4) 同上論文, p. 15。

動の高揚、ウーマン・リブ運動、麻薬問題、犯罪の増加、セックスなどにおける寛容革命、人間疎外の表面化等。岩元巖はこれを混乱の時代と呼んでいる⁵⁾。多様な物の見方が現れ、いわば価値判断基準が崩壊して、何が客観的視点か定めることが困難となって、ジャーナリズムはニュー・ジャーナリズムの方向で社会の変化に対応するものを生み出したといえることができる。

他方小説の世界では、一つの方向として、そのようなアメリカ社会を対象として見すえ「事実と異常なほどに密接に結びついた作品⁶⁾」を生み出すに至った。例えば1965年のカポーティの「冷血」、1967年スタイロンの「ナット・ターナーの告白」、1968年メイラーの「夜の軍隊」と続く。

ジャーナリズムの面でニュー・ジャーナリズムを出現させるに至った他の要素として、ハロウェイ・ブラウンは、「解説的ジャーナリズム」と「追求する報道」をあげている⁷⁾。いずれも複雑化の一途をたどる世界にあって、読者の必要を満たすため、早くから存続し、発達してきたアメリカジャーナリズムの伝統である。

次に文学がニュー・ジャーナリズムにおよぼした影響について概観すると、まずニュー・ジャーナリズムはリアリズムの系譜を引くものである⁸⁾。形態としては、多くの記者がノンフィクションの自伝的文学の形を使っている、とウルフは書いている⁹⁾。ジョイス等の「意識の流れ」の手法が point-of-view (観点) として、活用されている。そして、文学史上ニュー・ジャーナリズム的な特徴を持った数多くの作品、例えば、Dickens の 'Sketches by Boz', Mark Twain の 'Innocents Abroad', チューホフの 'A Journey to Sakhalin', ラフカディオ・ハーンが、1870年代のシンシナチの新聞に載せた記事、ジョン・ハーシーの「広島」、カポーティの「ミューズの声聞ゆ」などが大きな

5) 岩元巖「現代のアメリカ小説」, 英潮社, 1974年, p. 35.

6) 同上書, p. 37.

7) ブラウン, 前掲論文, p. 15.

8) Wolfe, Tom, *The New Journalism*, New York : Harper & Row Publishers, 1973, pp. 34, 41.

9) *Ibid.*, p. 42.

影響をおよぼしている¹⁰⁾。

ニュー・ジャーナリズム出現の経緯と社会的背景をまとめると図1のようになる。

ニュー・ジャーナリズムの特徴

ここでニュー・ジャーナリズムの特徴を2,3の点でまとめると次のようになる。まず扱う対象、取材のテーマの点からいえば、論争の焦点になりそうな問題を好んで取り上げている。これは元来一般のジャーナリズムが持つ特質の一つでもある。それから、人々の当世の生きざまを、現実の姿を示そうとする。そしてメイラーは歴史を記すのだ、と書いている¹¹⁾。ニュー・ジャーナリストの中には、次のような異文化集団(subculture)について取り上げた人々がいる。すなわち、急進的學生運動家、ロックミュージック演奏者、ヒッピーなどコミュニオンを形成する人々、麻薬中毒者、自動車スピード狂、さらにはマフィアにまで対象がおよんでいる。

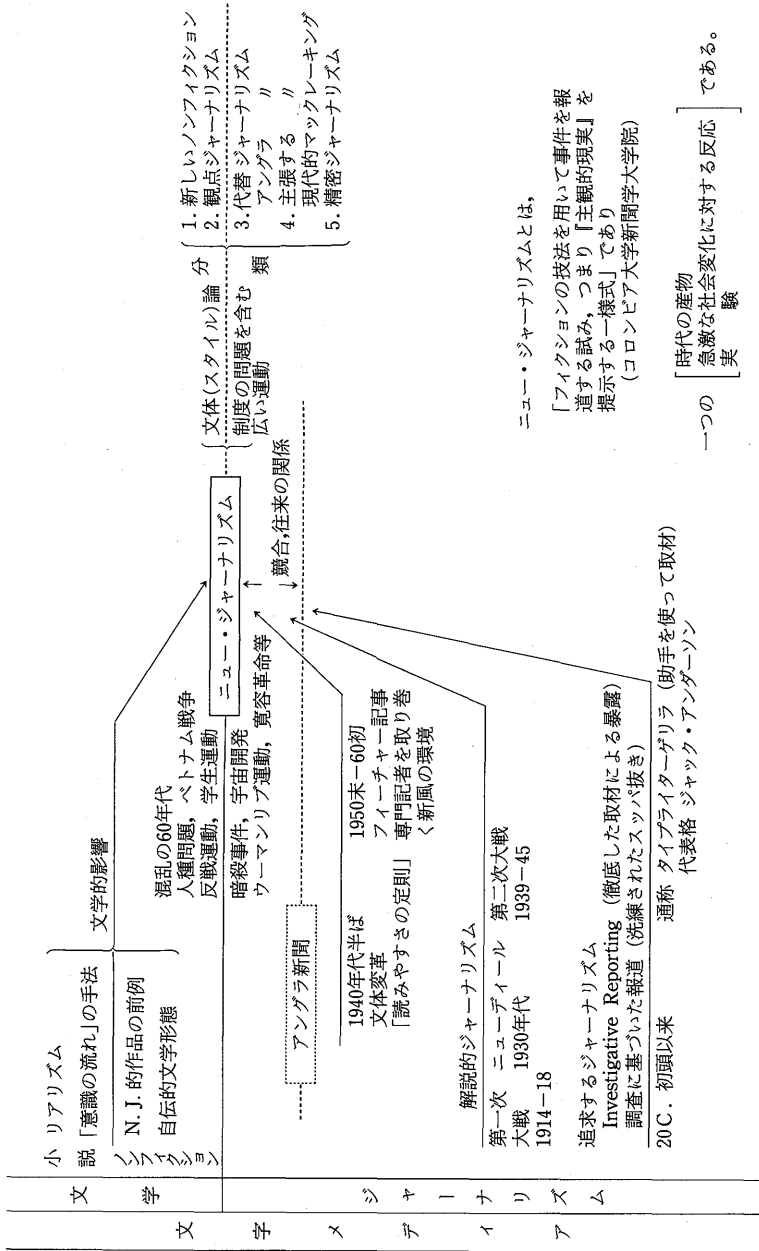
次にニュー・ジャーナリズムの姿勢と取材の方法の点でいえば、上のことから、多くが権力や体制、既存の伝統に批判的で挑戦の態度を取っていることがわかる。取材の方法は、現場に行き、足で取材することを大きな特色としている。足しげく通い、時間を費し、当事者と深い接触を保ち、ときには取材対象の活動や運動に参画する。このタイプのニュー・ジャーナリストにハンター・トンプソン、ゲイ・タリーズ、トム・ウルフなどがいる。

次にニュー・ジャーナリズムの文体や手法の点についていえば、彼らは小説家の技法をジャーナリズムに取り入れようと試みている。ニュー・ジャーナリズムの旗手とされるトム・ウルフによれば、彼らはリアリズムの技法、特にフィールドイング、バルザック、ディッケンズ、ゴーゴリの作品に見ら

10) Ibid., pp. 45, 46.

11) Mailer, Norman, *The Armies of the Night*, New York: The New American Library, 1968, p. 53.

図1 ニュージャーナリズム出現の経緯と社会的背景



れる技法から学んだという。ウルフは次の4つを主なものとして上げている。

1. 場面から場面へと移る構成。普通の叙述は最小限にとどめ、実際に生じた人々の生活上の場面を目撃していく。2. 対話をそのまま記録する。これによって登場人物の性格を他の方法に優ってよく描くことができる。3. 第三者の視点による記述。登場人物の視点で場面を描き、その人が感じた気持ちを読者に判ってもらう。4. 生活事情の詳述。すなわち、習慣、癖、食事、衣服、家具、周囲の人に対する行動様式等々について記録する。これは人々の生活現状の象徴となるからである¹²⁾。

一般に、対象に同情と理解を寄せ、スタイルは主観的、感情的であって、格式ばらず、活気にあふれ、個性を前面に出している。そして上記以外の技法として、flash back, time shift, 情景描写、劇的なナレーション、意識を語る独白なども用いている。

以上の特徴に対して、無意味で冗長な記述を延々と読まされる、ニュー・ジャーナリズムは表面的、短命な流行、娯楽一辺、道徳的に無責任、無批判的、ほりがない、あるいは印象主義的すぎる、などの批判がでている。

カポーティの「冷血」

ここで、トルーマン・カポーティの「冷血」(‘In Cold Blood’)を取り上げてみる。これは1959年11月にカンサス州ホルコム村で起きた一家惨殺の事件をカポーティが直接取材し、6年がかりで6千ページのノートをもとに1965年に書いた作品で、大変成功し「新しいジャンルを生み出した¹³⁾」とされている。そして、この作品の出現で、ニュー・ジャーナリズムに新しいはずみを与えられ、いわば市民権が与えられたような形となった。もともとカポーティはニュー・ジャーナリストを独創的ジャーナリズムと何らかかわりがなく、

12) Wolfe, op. cit., pp. 31—32.

13) 福田陸太郎編「アメリカ文学思潮史—社会と文学—」中教出版、1975年、p. 434.

としんらつな態度を取っている¹⁴⁾。

「遠い声、遠い部屋」で登場人物に、「ぼくは写真屋じゃないんだ」と語らせて反リアリストの立場を取っていたカポーティは方針の大変更をはかったことになるが、以前から「ミューズの声聞ゆ」などルポルターージュにも手がけており、何年間か、journalistic novel を書く機会を捜していた、と1975年の「カメレオンのための音楽」の序文で書いている。

さて、カポーティはこの「冷血」を発表して、フィクションかノンフィクションかと騒がれたとき、これはノンフィクション・ノベルであると称している。では、このノンフィクション・ノベルとは何であろうか。カポーティはこれを「虚構芸術 (fictional art) のあらゆるテクニックを使用しながら、しかも、何一つとして事実に基づかないものはない」といっている¹⁵⁾。稲澤秀夫はカポーティの発言を整理して非虚構小説の作家に求められる資質と注意を箇条書きにしているが、それによると、ノンフィクション・ノベルを書くには、事実を正確に把握し、虚構、すなわち事実のわい曲、でっちあげを行ってはならない、作者は、主観を殺し、「私が」を作品の中へ出してはならない、という¹⁶⁾。例えば、「冷血」の犯人処刑の場面は、刑事のアル・デューイの視点で描写している。しかし、非虚構小説の作家は、独創的でなければならず、虚構の技法を完全に掌中におさめていなければならない、ともいっている¹⁷⁾。カポーティにとって、非虚構小説はすぐれた虚構作家にだけ書けるもの、と映っている。

いずれにしても、取材した材料を元に再構築するに当たって、想像力が働かされ、ぼう大な資料の中から選択していくときにも作者の好みや基準で行われるのであるから、作品が現実と全く同じということはありません。従って、ノンフィクション・ノベルである、というのは、適切な呼び名である。

14) 稲澤秀夫「トルーマン・カポーティ研究」、南雲堂、1970年、p. 140。

15) 同上書、pp. 138, 139。

16) 同上書、pp. 143, 146, 147。

17) 同上書、pp. 144, 145。

さて、ノンフィクション・ノベルを書くには、大きな制約がある。創作活動と違って、登場人物や事件を勝手に造り出すことが許されず、与えられたものしか用いられない、ということである。カポーティ自身6年も費して、そこにストーリーがなければ、その年月を全く棒に振ることになるので大きなリスクを冒している、と述懐している¹⁸⁾。しかし、幸い、2人の殺人犯の中ペリー・スミスがカポーティの共感を呼ぶ人物で、彼に比重を置いて、いわば主人公として、作品を描くことになる。生い立ち、性格、趣味など人間像にこれまでカポーティが描いてきた孤独な主人公に似たものを、あるいは自分に似たものを見出したのであろう。このペリー・スミスに被害者の一家の主人クラッター氏を対比させる。同氏は善良で積極的に生き、成功を収め、しかも地域社会と人々の福祉に配慮を払う人であるが、カポーティはクラッター氏とその家族の中に、アメリカの共同社会に内在する保守、排他、暴力、驕慢の要素を垣間見、作品中に示唆している。そして、スミスを生んだのは、スミスを追放した社会にほかならないことを暗示する¹⁹⁾。

従来、個人の問題に視点を置いて執筆してきたカポーティもこのように、混乱のもとである社会について考えるにいたったのであるが²⁰⁾、このような示唆をするに当たって、クラッター氏の描き方、ストーリーの進め方、材料の選択、所々に現れる作者の判断が明らかに、作者の顔、あるいは見解として出ていて、上記の「主観を殺し」「私を」を出さない、という非虚構作家の注意事項と矛盾している。

メイラーの「死刑執行人の歌」

次にノーマン・メイラーの「死刑執行人の歌」(‘The Executioner’s Song’)

18) Capote, Truman, *Music for Chameleons*, New York: Random House, 1975, p. xv.

19) 福田編, 前掲書, p. 435.

20) 岩元, 前掲書, p. 38.

に入る。メイラーはカポーティの「冷血」を想像力不在の失敗作と評したのであるが²¹⁾、後出のリストからも判るように、ニュー・ジャーナリズムに属すると考えられるルポルターージュをたくさん著わしており、ある人はメイラーを、ニュー・ジャーナリズムの旗手と呼んでいる²²⁾。

「死刑執行人の歌」は、助命嘆願の勧めを拒否して、アメリカで10年ぶりに、死刑に処せられたゲーリー・ギルモアの生涯を、特にその最後の9か月を関係者すべて実名で登場させて描いたもので、創作か記録かの議論を呼んだ。1万5千ページにおよぶ記録を1,050ページに仕上げている、メイラーも事実に基づく物語‘true life story’と呼んでいる。

国家権力に反抗する自由主義思想の指導者をもって任じるメイラーは、同時に権力指向の野心を持っており²³⁾、事実を書くことによって自分の生きる時代に影響をおよぼしたい、と思っているようである²⁴⁾。その方向で、まずラリー・シラーの言葉によって、歴史の記録をするのだ、という自負がこの作品に流れている²⁵⁾。それは当然米国の死刑制度、刑務所制度、それを生み出した社会的背景、あるいはさまざまな登場人物を含めて一般国民の生活状況の記録を意味しているが、同時にこの作品の場合、副産物として、事件の起こった地域に住み、また登場人物の大半と大なり小なり係わりのあるモルモン教徒についての今日の記録にもなっているのではないかと私は観察している。メイラーは、批判的に登場者の口を通して記載している²⁶⁾。

21) Capote, op. cit. p. xv.

22) 佐渡谷重信「ノーマン・メイラーの世界」、評論社、1976年、p. 190。Johnson, Michael L., *The New Journalism*, Lawrence, Kansas: The University Press of Kansas, 1971, pp. 7, 64。

23) 佐渡谷、前掲書、p. 190。ハリー・T・ムーア、龍口直太郎他訳「現代アメリカの小説家たち」評論社、1975年、p. 236。

24) ムーア、同上書、pp. 235, 417。

25) Mailer, Norman, *The Executioner's Song*, London: Arrow Books, 1979, pp. 857, 877。

26) モルモン教徒は letter of the law に捕われ、今日のパリサイ人である、あるいは、「血を流す者は血をもって、償わねばならない」というブリガム・ヤングの言葉を引

(次頁脚注へ続く)

次に、読者はこの作品を読んでいて、さまざまな論争的となる事柄が含まれていることに気付く。その中に、死刑の是非、刑務所制度のあり方、子供の虐待、神秘主義、マスコミの過激な取材活動などがある。読者は読んでいて、次から次へとそういった事柄について疑問を感じる。

それから muckraking 的な要素、言い換えればスッパ抜きの要素もこの本を面白い読み物としている。新聞や報道機関の裏話、例えば異なった社の記者間にある過去の貸し借りが二者間の人間関係を左右すること、どんな理由であれ、ギルモアのように知名度が高まると、それだけで、取材に応じる毎にお金が集まるようになること、司法界の権力地図、判決が数度にわたり裏工作によってどんでん返しになったことなど。このスッパ抜きの部分で、ときに、何にでも詳しく紙面をさくので、くどい、という印象を受けることがある。

作品となるかどうかの判断をラリー・シラーが、後にメイラーが、行うのであるが、やはり、「冷血」と同様ゲーリー・ギルモアなる人物に、材料を見出したので取り上げている。ギルモアの場合、その知性に関心が払われる。数人の登場者が、ギルモアの知性に感心し、驚嘆の言葉を発しているのが取り上げられている。そして、「体制がこの男を駄目にした」という発言を引用している。また、ギルモアの父がユダヤ人であったことも、ユダヤ系作家のメイラーには、結果的にギルモアに対する関心を深めさせたかも知れない。ギルモアは、人の心を打つ、洗練された手紙を愛人に書いており、絵画の才があり、文学書も読んで詩を暗記しているほどの男であるが、不可解な多面性を持っていて、取材者は幼時における経験にその鍵を求め、死刑執行の前に懸命のインタビューを繰り返す。そして、ギルモアが、少年の頃小さな男の子が黒人に、いじめられ、もて遊ばれているところを、救った話を聞き出

用したりしている。しかし若い青年を世界に派遣する独自の伝道制度や、教徒の家を定期的に訪ねる家庭訪問の活動などが随所に、詳しく描かれている。

参考までに、マーク・トゥェンも1861年「苦難を忍びて」と題して、モルモン教徒を訪れたルポルターージュを残している。

す。それを聞いた取材者は、女の子が電話で、「友達が妊娠しました。お医者さんはいませんか」と問うとき、本当は自分のことをいっているのと同じように、本当は、ゲーリーがその白人の小さな男の子ではなかったか、と推理する。

この作品の英語についていえば、colloquialism と obscenity が1つの特徴であるといえる。「夜の軍隊」でメイラーが書いているように、アメリカ人はユーモアに生き、ユーモアは obscenity にあり、それを含む言葉が最もアメリカ的である、と考える彼は、obscenity 解禁の態度を取り、この1979年の作品では、登場人物の言葉に、どんどん obscene language を使わせている。また一般に文が短く、簡潔であるのも特徴である。

終わりに

結語として、筆者がなぜニュー・ジャーナリズムに、関心があり、このジャンルに属する作品を読むのか、といえば、虚構でない、本当にあったことに、現実のアメリカ社会に関心があるから、ということになる。しかし繰り返し読むことがあるか、といえば、新聞雑誌の読者が、優れた論説や評論、あるいはニュースの特集記事を読んでも、それを取っておいて、読み返すことがあまりないように、必要が生じない限り、あまり読み返すことはないのではないかと思う。

ニュー・ジャーナリズムの将来について、ウルフは、ニュー・ジャーナリズムで行われたのと同じ入念な取材に基づいた journalistic novel, または、documentary novel, または「真剣な社会リアリズムの小説」に大いなる未来があるだろう、と述べている²⁷⁾。

筆者もニュー・ジャーナリズムと呼ばれている様式が、ジャンルとして残り、消えてしまうことはないだろう、と考えている。

27) Wolfe, op. cit. p. 35.

マイケル・L・ジョンソンは、ニュー・ジャーナリズムの貢献について、次のように書いている。「マクルーハンによれば、人は自分の置かれた環境を理解するのに、これまでとは違った別の意識をもって、新しい目で眺めなければならない。しかし、同時に人間活動に批判的精神をもって参画し続けなければならない。ニュー・ジャーナリズムは、多少なりともこのマクルーハンの意見に沿うよう outlaw 的な態度を取ってきた。従来硬直したメディアのあり方を超越し、しかも、報道対象に近くあつてかかわってきた。新しい意識と新しい言語で、この世界に起こっている変化を新鮮にとらえ、役立つ情報を提供してきた。そして、いろいろな面で、伝統的なジャーナリズムより、徹底し、卒直で、知的かつ批判的であることを実際に示してきたのである。²⁸⁾」

Appendices

1. ニュー・ジャーナリズムの先例と考えられる作品

Charles Dickens, "Sketches by Boz."

Henry Mayhew, "London Labour and the London Poor."

Mark Twain, "Innocents Abroad."

Chekhov, "A Journey to Sakhalin."

Lafcadio Hearn, "Slow Starvation," Cincinnati Enquirer, Feb. 15, 1874.

Ida M. Tarbell, "History of the Standard Oil Company." 1904.

Upton Sinclair, "The Jungle." 1906.

Stephen Crane's vignettes of the Bowery for the New York Press.

John Reed, "Ten Days That Shook the World."

George Orwell, "Down and Out in Paris and London."

28) Johnson, op. cit., pp. xii, xiii.

註 本稿は大学英語教育学会 (JACET) 中国四国支部第 1 回大会 (1984年 6 月 3 日, 岡山・ノートルダム清心女子大学) で行った研究発表をもとに加筆したものである。

Ernest Hemingway's reportage.

James Agee, "Let Us Now Praise Famous Men." 1939.

John Hersey, "Joe Is Home Now." (Life, July 3, 1944)

John Hersey, "Hiroshima." 1946.

Truman Capote, "The Muses Are Heard." 1956.

Truman Capote, "The Duke in His Domain." 1957.

2. ニュー・ジャーナリズムに属すると考えられる作品

Jimmy Breslin, "The World of Jimmy Breslin," annotated by James
G. Bellows and Richard C. Wald., 1969.

Truman Capote, "In Cold Blood." 1965.

Truman Capote, "Music for Chameleons." 1975.

Robert Christgau, "Beth Ann and Macrobioticism." 1968.

William J. Craddock, "Be Not Content." 1970.

Hunter Davies, "The Beatles." 1968.

Joan Didion, "Slouching Towards Bethlehem." 1966.

Hal Draper, "Berkley: The New Student Revolt." 1965.

John Gregory Dunne, "The Studio." 1968.

John Gregory Dunne, "Vegas: A Memoir of a Dark Season." 1973.

Jonathan Eisen, ed., "The Age of Rock: Sounds of the American
Cultural Revolution." 1969.

Paul Ehrlich, "The Population Bomb." 1968.

Harlan Ellison, "The Glass Teat." 1970.

Joe Eszterhas, "Charlie Simpson's Apocalypse." 1972.

Jerry Farber, "The Student as Nigger." 1969.

Ralph J. Gleason, "The Jefferson Airplane and the San Francisco
Sound." 1969.

Barbara L. Goldsmith, "La Dolce Viva." 1968.

- Richard Goldstein, "Gear." 1966.
- Robert Gottlieb, Peter Wiley, "Empires in the Sun : the rise of the New American West." 1982.
- Robert Gottlieb, Peter Wiley, "America's Saints : the Rise of Mormon Power." 1984.
- Rasa Gustaitis, "Turning On." 1970.
- Tom Hayden, "Rebellion and Repression." 1969.
- William Hedgepeth, "The Alternative: Communal Life in New America." 1970.
- John Hersey, "The Algiers Motel Incident." 1968.
- John Hersey, "A Reporter at large, Hiroshima: The Aftermath." 1985.
- Seymour M. Hersh, "May Lai 4." 1970.
- Michael Herr, "Khesanh." 1969.
- Nicholas von Hoffman, "We Are the People Our Parents Warned Us Against."
- Nicholas von Hoffman, "Revolution for the Hell of It." 1968.
- Nicholas von Hoffman, "Woodstock Nation." 1969.
- Jerry Hopkins, "The Rock Story." 1970.
- Jonathan Kozol, "Death at an Early Age." 1967.
- Jane Kramer, "Allen Ginsberg in America." 1970.
- James Simon Kunen, "The Strawberry Statement : Notes of a College Revolutionary." 1970.
- Joe McGinnis, "The Selling of the President 1968." 1969.
- Joe McGinnis, "Going to Extremes."
- Norman Mailer, "Superman Comes to the Supermarket." 1960.
- Norman Mailer, "The Presidential Papers." 1963.
- Norman Mailer, "Cannibals and Christians." 1966.

- Norman Mailer, "The Armies of the Night." 1968.
- Norman Mailer, "Miami and the siege of Chicago." 1968.
- Norman Mailer, "Of a Fire on the Moon." 1970.
- Norman Mailer, "On the Fight of the Century: King of the Hill."
1971.
- Norman Mailer, "The Prisoner of Sex." 1971.
- Norman Mailer, "St. George and the Godfather." 1972.
- Norman Mailer, "Marylin." 1973.
- Norman Mailer, "Some Honorable Men: Political Convention 1960—
1974." 1975.
- Norman Mailer, "The Fight." 1975.
- Norman Mailer, "The Executioner's Song." 1979.
- Greil Marcus, ed., "Rock and Roll Will Stand." 1969.
- Gene Marine, "The Black Panthers." 1969.
- James Mills, "The Detective." 1972.
- Ralph Nader, "Unsafe at Any Speed." 1965.
- George Plimpton, "Paper Lion." 1964.
- Dotson Rader, "I Ain't Marchin' Anymore." 1969.
- Rex Reed, "Do You Sleep in the Nude?" 1968.
- James Ridgeway, "The Closed Corporation." 1968.
- Jerry Rubin, "Do It!" 1970.
- John Sack, "M." 1966.
- Arnold Shaw, "The Rock Revolution." 1967.
- "Adam Smith," (George J. W. Goodman) "The Money Game."
- Susan Sontag, "Trip to Hanoi" in "Esquire" Dec. 1968.
- Terry Southern, "Red Dirt Marijuana and Other Tastes." 1955.
- Gay Talese, "The Overreachers." 1963.
- Gay Talese, "Honor Thy Father."

Gay Talese, "Thy Neighbor's Wife." 1975.

Hunter Thompson, "Hell's Angels: A Strange and Terrible Saga." 1966.

Hunter Thompson, "The Kentucky Derby Is Decadent and Depraved." 1970.

Nicholas Tomalin, "The General Goes Zapping Charlie Cong." 1966.

Dan Wakefield, "Supernation at Peace and War." 1968.

Garry Wills, "Martin Luther King Is Still on the Case." 1968.

Tom Wolfe, "The Kandy-Kolored Tangerine-Flake Streamline Baby." 1964.

Tom Wolfe, "The Electric Kool-Aid Acid Test." 1968.

Tom Wolfe, "Radical Chic & Mau-Mauing the Flak Catchers." 1970.

Tom Wolfe, "The Right Stuff." 1979.

3. 'In Cold Blood' に現れた技法と英語の特徴

1) 第三者の視点で描写

i. she [Mrs Clutter] had met and married Herb, a college classmate of her oldest brother, Glenn; ... Herb was handsome, he was pious, he was strong-willed, he wanted her — and she was in love. p. 38.

ii. they both had been proud of Nancy; she had done so well, remembering all her lines, and looking... beautiful, p. 19. ナンシーの両親の視点

iii. Smith, though he was the true murderer, aroused another response, for Perry possessed a quality, the aura of an exiled animal, a creature walking wounded, that the detective could not disregard. p. 341. 刑事デューイの視点(下線部は simile の例でもある)

2) Represented Speech

- i . Dick had made up his mind : stockings of any shade were unnecessary, an encumbrance, a useless expense, and, after all, anyone they encountered would not live to bear witness. p. 48.
- ii . It rankled in him, the way Dick mouthed those two words (No witnesses), as though they solved every problem ; it was stupid not to admit that there might be a witness they hadn't seen. p. 48.
- iii . 'Skeeter was a horse.' A beautiful horse, a strawberry stallion he had raised from a foal. How that Skeeter could take a fence ! p. 52.

3) Mixed Speech

- i . And so, lifting the office phone, Nancy told Mrs Katz yes, fine, bring Jolene right on over. p. 30.
- ii . I asked him hadn't he ought to put on some clothes first, p. 215.
- iii . 'Seen that car ?' Mr Helm asked.
Yes, Kenyon had seen a car in the driveway. p. 51.

4) Other techniques

- i . Cut back 初めは被害者の家族と殺人犯2人の動き，犯行後は後者と主として捜査側の動きを絶えず交互に追う形をとっている。
- ii . Panorama
 - * The land is flat, and the views are awesomely extensive ; horses, herds of cattle, a white cluster of grain elevators rising as gracefully as Greek temples are visible long before a traveller reaches them. p. 15.
 - * Mr Helm picked up his spade. Crows cawed, sundown was near, but his home was not ; the lane of Chinese elms had turned into a tunnel of darkening green, and he lived at the end of it, half a mile away. p. 52. (下線部は metaphor の例でもある)

iii. Fade-out

* 【After the description of Mrs Clutter】

Now, on this final day of her life, Mrs Clutter hung in the closet the calico housedress she had been wearing, and put on one of her trailing nightgowns and a fresh set of white socks. Then, before retiring, she exchanged her ordinary glasses for a pair of reading spectacles. Though she subscribed to several periodicals, none of these rested on the bedside table—only a Bible. A book-mark lay between its pages, a stiff piece of watered silk upon which an admonition had been embroidered. ‘Take ye heed, watch and pray: for ye know not when the time is.’ p. 41.

(最後の部分は pathos ^{ベーツス} 哀感を誘う言葉となっている)

iv. Simile 明喩

* Like the waters of the river, like the motorists on the highway, and like the yellow trains streaking down the Santa Fe tracks, drama, in the shape of exceptional happenings, had never stopped there. pp. 16—17.

v. Metaphor 隠喩

* those sombre explosions...stimulated fires of mistrust in the glare of which many old neighbours viewed each other strangely, and as strangers. p. 17.

* ‘Gosh, I didn’t know he was such a shrimp.’

‘Yeah, he’s little. But so is a tarantula.’ p. 340.

* I sure as hell never killed four people in cold blood. p. 306.

4. ‘The Executioner’s Song’ に現れた技法と英語の特徴

1) Colloquialism

i. vocabulary

zap (move quickly), mag (magazine), drained (exhausted), yep, y’all,

sissy, ya, dude, blah blah blah, buddy, bod (body).

ii. Sentences

- * I couldn't care less.
- * I know the name of the game.
- * That annoyed Brenda no end. (a great deal)
- * Gary was kind of quiet.
- * He zipped through Provo. (moved quickly)
- * (He) Couldn't believe Gary had ripped off water skis.

2) Non-standard English, non-standard spellings retained in quotations, and other devices attracting attention

i. Non-standard English

- * we was, they was, he don't, I says, it don't
- * I seen, I been
- * it ain't, I ain't, you ain't, there ain't
- * littlest, theirself, hisself
- * never paid no attention, it didn't cost nothing, weren't looking for nothing,

ii. Non-standard spellings

thru, nite, rite (right), s'pose, gonna, wanna, tryin', hopin', visitin, swimmin, c'mon, outa (out of), sorta (sort of), thot (thought), jest (just), lak (like), loveing, makeing

iii. Other devices attracting attention

- * Ohh. Ohhh. Ohhhhh. Uhhh. t-t-thrr-thereby.
- * "Yeah, yeah," he said, "yeah, yeah, yeah, yeah, yeah, yeah."
- * matter-of-fact California Voices/
a total go-down-the-road-with-him gambler/
Would-you-want-this-man-who-defends-clients-who-stick-ball-point-pens-in-middle-aged-women's-ears-to-be-your-next-Attorney-

General had been the whispered theme of the campaign./
pull-it-out-of-the-typewriter, get-it-to-the-printer jobs/

3) Obscenity

いわゆる four-letter words を含んだ冒瀆表現 (blasphemy), 卑猥表現 (sex-related expressions), 汚い表現 (scatology) が, 間投・挿入表現 (Expletives), 罵倒表現 (swearing), 悪罵・ののしり表現 (Invectives) として会話部分にかなり頻繁に使われている。

4) Other techniques

i. Cut back

犯行前に被害者の 2 つの家族の様子とギルモアの動きが交互に描かれている。

ii. 情景描写

There they were on top of the Hotel Utah fifteenth-story level, looking at the towers of the Mormon Temple across the street at the same height, most important Mormon temple in all the world. Those towers had floodlights on them that made the temple look like a castle — a very dramatic sight. p. 811. (下線部は simile)

iii. Close up

Then he signed his name in large letters, GARY GILMORE. p. 231.

iv. Simile

Her head was ringing like an alarm clock. p. 179.

v. Metaphor

* There was a silence between them you could push. p. 179.

* Stephie was ready to kill him. Here it was supposed to be a vacation, and he was living on the phone. p. 781.

vi. Represented Speech

* She said she could make him a sandwich. That was okay.
He would run down and get a six-pack. p. 149.

* She couldn't believe the way he had set them out on the trunk of the car. If any of the neighbors looked through the window,
they wouldn't believe what they were seeing.

vii. Mixed Speech

* She knew Gary's mind. Don't worry. Don't worry 'cause
I'm close to killing Pete. She decided she better talk to Galovan herself. p. 129.

* A man might slip cufflinks or a watch into his pocket, but how did you steal those big slats right out of a store?

* Three days later, at lunchtime, there was Gary in the doorway again. Talking fast. Said, I thought I'd come and have a beer with you. Got some beer? Gee, she didn't, said kathryne, just coffee. Well, he told her, I'll come in anyway. Got something to eat? p. 149.